

# 沖

5  
月  
号



# 人も芦も

林 翔

## 教師俳句

風の日も人も尖るよ芦の角

梅咲けり薄紅梅は遥けき色

馬の仔が生るよ遠き波奏で

甲斐濃境はいつれ木の芽晴

千葉市在住の沖会員松岡みつを氏が東京電機大学付属高校長を定年退職された記念に『私の教師歳時記』という四百頁余の文集を出された。中には、みつを氏の句が沢山ちりばめられているが、教師俳句としては受験の子父と見上げる大樹かなが深みのある佳句と思うし、教師俳句以外では、亡き登四郎師を偲ぶ句が毛筆書きの写真版で入っている。逝きし師の男一途や五月来る

また、著者以外の俳人の句も、数多く載せてあるが、やはり登四郎氏の句が断然多い。  
春ひとり槍投げて槍に歩み寄る  
は、市川学園の陸上競技部員の練習風景だが、青春のアンニュイを詠みとめた傑作と言えよう。

長靴に腰埋め野分の老教師

は、市川中創立以来の菅田良岳教諭を詠んだものだが「長靴に腰埋め」の誇張が実感を以て迫る名句だ。

土を や や 残す 舗装路 齎生ふ

自動ドアするりと 東風は置去りに

ステッキに 青き突かせて 青き踏む

娘の 齢今は 思はじりらの 花

春ふかき夕日 滴る 行<sup>にはたづみ</sup>澄

三月十四日、鈴木真砂女逝く

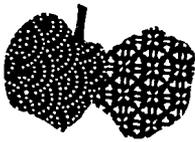
柳の芽女 将真砂女の なつかしき

私の句も若干載っており、  
札深き落第生に何言はむ  
拙なかりし子も進級すいぬふぐり  
等である。

私の第一句集『和紙』に教師俳句  
が幾つ収められているかと数えてみ  
たら、右の二句を含めて三十七句で  
あった。中の幾つかを挙げる。

梅雨ふかき声はげましつ教師われ  
生徒の眼緋桃買ふ吾を祝福す  
落第以後かの子は遂に胸に棲む  
石蹴つて石光らしむ卒業期  
落第生励ますペンの太く鈍し  
休暇語る汗の生徒ら燦爛たり  
肩いからせ最も小さき入学生

林 翔



# 朴の芽

能村 研三

四月忽々

文豪といふ名久しきまむし草

春燈や背にあらはる愁ひ見ゆ

鷹鳩と化して今さら名も聞けず

心当ての土橋に遭ふて探梅行

役所勤めの私にとって、四月は年度始めの慌しさを経験しなくてはならず、ある程度のは覚悟していたのだが、今年はいろいろな事が起きて多忙を極めた。

一番下の娘の紗恵は美容師になりたいとこの春専門学校を卒業し、親元を離れ千葉で寮暮らしが始まった。子供が親元から離れたことがなかったのも、子供よりむしろ親の方が戸惑うことが多く落ち着かない日々を過ごした。

そんな矢先、私の方も四月の人事異動で財団法人文化振興財団の常務理事として文化会館の館長への派遣の命を受けた。

今までの仕事とも大いに関連する所であるので、仕事に対する不安はなかったが、土・日曜が必ずしも休みではないので、今まで指導していたそれぞれの俳句会の調整に苦労した。当分の間はスケジュールをやり

大辛夷見上げて我に浮力あり

直立に桶に突き差す鯉かな

水悼の反り身を効かす花明り

徐行して登坂車線の花見かな

国東・神宮寺

かげろふに目鼻溶けゐる焼け仏

朴の芽のにはかにほぐれ父の忌へ

繰りしなければならぬだろう。

そんな慌しい年度始めであったが、いつも元氣な妻の悦子が狭心症で近くの病院に緊急入院してしまった。幸い十日間で退院することができほっとしているが、家庭の中で妻が居ない生活は初めてであったので戸惑うことが多かった。しかし、子供たちが女の子であるので、妻の入院中も家事はきちつとやってくれ助かった。

夫婦共々、日頃の多忙で睡眠時間が足りなかつたり不規則な生活が続いたからであろう。

妻の一病も良く解釈すれば、神様からの警告であつたのかも知れない。これからは、私も五十を過ぎていたので、余り過信しないで体に気をつけなくてはいけないとつくづく反省させられた。



# 蒼茫集

母の国

鈴木節子

佐保姫のそろりそろりと信濃かな  
鳥引いて姥捨山の残りけり  
陽炎を追うて松本城下町  
訪へば雪解雫す母の国  
こみ上ぐるものや信濃は雪解どき  
雪解風ああと峠に立てりけり

来 年

菅谷たけし

天天とみどり噴きあげ末黒葦  
玻璃越しの沖を船ゆく吊し雛  
軒低く白魚いまも商へり  
薄氷のゆれて滲めり緋鯉の斑  
来年が漠然とあり雛納む  
輪郭のなき雲浮かべ水温む

陽 炎

酒本八重

陽炎もともに反芻して牝牛  
お水取待つ間礎石へ二人掛

脇侍たる誇りをいまに黄沙降る  
母のため一枚開く春障子  
雛さまに二泊三日の留守たのむ  
どの山も雲が包みて彼岸くる

春 光

遠藤真砂明

深息の自づと朝の桜東風  
蟻穴を出でて園児に囲まるる  
春光に巨き錨を放ちけり  
渡舟着く春のかもめを先触れに  
一舟に一人一湾 冴返り

悼む鳩子さん

天界の羽音に野辺のあたたかし

ささやかな

梅村すみを

青き踏む母をいたはる歩幅にて  
貝の舌気ままに延びて春深し  
涅槃西風けふささやかな税納む  
惜春の腕に透けゆく吉野葛  
埋めたての海はるかにす浅蜷飯



# 潮鳴集

言の葉

坂本京子

言の葉にきせたき衣の朧ほど  
骨休めほどを眠りて春の風邪  
牡丹の芽思ひあふるるものいろ  
紀の国の古道や眩し春の草  
蜺舟はるか空に吸はれけり

看とり尽して

小菅暢子

梅東風や我が今生の一書成る短歌集『今生』  
我が一書柩に納め春の雷  
春昼やあるじ待つがに車椅子  
看とり尽してなほ悔いのあり鳥曇  
春寒やときをり疼く手術痕

握手

今村恵子

啓蟄や汐留にビル競ひ建ち  
卒業の空晴れわたる握手かな



砂の手を波もて洗ふ涅槃西風  
紫木蓮りんと咲かしめ真砂女逝く  
春の夢さめ鳥籠に鳥をらず

面輪

島崎省三

あきらかに梅が香と知る雨後の闇  
肅として男の子正座す雛のまへ  
雛壇の緋は垂乳根のいろならめ  
初めての恋の面輪をもつひひな  
雛納め一家離散といひつべく

春田打

宮坂恒子

春田打八ヶ岳より風のまつしぐら  
高鳴ける帰雁のあとの空の碧  
白魚のみごもりしまま透きとほる  
思ひきり海風握る合格子  
斑雪嶺へ牛百頭の放たるる

# 沖作品



## 能村研三選

指先に菜の匂ひ水温む

茅野

高橋あゆみ

鳥帰る胸の釦のとれかかり

釜揚げの麵に差し水あたたかし

踏みながらジーンズ洗ふ桜東風

皿の絵にバターの溶ける復活祭

料峭の夜目にも白き波頭

山梨県

長岡 新一

まだ翅をたたましままのシクラメン

オカリナの音色に染まる春の風

早春の音の埧塙の水車小屋

頭骨に裏おもてあり冴返る

あともどりしても初音の一度きり

浦安

谷口みちる

鳥雲に手で識る和紙のうらおもて

手開きの小魚を干す涅槃西風

大地よりもらふ治癒力青き踏む

春うれひ積木くづしの厨ごと

三輪山へヒツチコツクの寒鴉

天理

福山 悦一

神事待つ鋤鋤ぬらす春の雨

露の臺僧衣につきし泥乾く

いつよりかよき距離おぼえ花菜漬

春灯楷書のごとき夫の顔

雛の灯に浮かぶ一掬の柱疵

岡崎

柴田 近江

きつぱりと仕上げ弓師の竹雛

丘幾重生すずし絹仕立てに春の雪

嘴鳴らす引きを間近の気負ひ鴨

舟小屋に三月の風吹き抜けて

東京

福嶋千代子

まどろみの春昼といふ壺のなか

灯台守垣つくろうて転勤す

濃紅梅美子の墓に咲きこぼれ

凍瀧や北斗銀河の時刻む

薄氷の刃先は水になつてをり

茨城県

今瀬 一博

鬼やらひ影を大きく打たれをり  
雛明かり天与の糸くぼあらはれし  
どちらまでちよつとそこまで深雪晴  
氷<sup>も</sup>面鏡たたいて渉る石叩  
新潟県 長谷川 春

大白鳥帰心昂ぶり啼き交はず  
意志といふもの美しや霏々と雪  
啓蟄やいくさの微震はじまりぬ  
東京 石川 笙児

三月の川波まぶし肩車  
花辛夷帝のやまひ癒えにけり  
流鏑馬の的はづせしも威を保つ  
川崎 菅原 健一

故郷や等身大の春の雪  
置き忘れし手袋片手春めきぬ  
濁点のとれて鳴き合ふ春鴉  
諏訪 矢崎すみ子

湖の青い夕闇雛の灯  
湖に昇る朝日やガラス雛  
春望や伏流杓に溢れしめ  
茨城県 島田 浩美

甲斐駒ヶ岳の凜然として名の木の芽  
冬生まれらしき芯あり次男坊  
さはさはと竹にあかるき春の雪  
市川 近藤 栄治

春浅し風のあはさに揺らぐもの  
春雨や母の来し方知る木箱  
爪を切り終へて本復春の風邪  
まつすぐに廊下静まり卒業歌

たつぷりと肺膨らます梅日和  
雛の夜や岬泊りの船灯  
編み直す史書に山山にが笑ひ  
浦安 安藤しおん  
あと五分ねかすパン種轉れる  
ひかり紡ぐ湾のさざ波鳥雲に  
春愁や合掌のまま豆双葉  
雁風呂や北へ行く貨車くぐもれり  
東根 小野 白瓶  
残雪や翳りし壕の水平ら

### 新人賞予選句（五月）

踏みながらジーンズ洗ふ桜東風  
料峭の夜目にも白き波頭  
高橋あゆみ  
大地よりもらふ治癒力青き踏む  
三輪山へヒツチコックの寒鴉  
谷口みちる  
丘幾重生絹仕立てに春の雪  
福山悦子  
灯台守垣つくろうて転勤す  
荏田 近江  
凍瀧や北斗銀河の時刻む  
福嶋千代子  
意志といふもの美しや霏々と  
今瀬 一博  
啓蟄やいくさの微震はじまり  
長谷川 春  
濁点のとれて鳴き合ふ春鴉  
石川 笙児  
菅原 健一

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

踏みながらジーンズ洗ふ桜東風 高橋あゆみ

ジーンズなどデニムの生地ですでているものは、色が落ちるので他のものとは一緒に洗わず単独で洗うことが多いが、ごわごわしているのを洗濯機で洗うよりも風呂場で踏み洗いをした方が洗いやすい。ジーンズを裏返しにして、必要以上に色落ちがしたり、擦り切れをなくすることも重要で、足で踏みながら汚れを落としていく方法だ。この句の旨さは何といつても桜東風という季語の幹旋がよい。まだこの季節は洗濯の踏み洗いをするにも水の冷たさを感じる頃だが、その冷たさも辛さをとまなうほどのものでなく、素足で水の感じをつかめるにはちょうどいい。季語の桜東風、桜の咲くころに北東より吹く風のことを言うが、一句の舞台を演出するにはただ東風だけでなく桜東風だからこそ成立する。

料峭の夜目にも白き波頭 長岡 新一

「春だなあ」と思わせるような暖かい日がつづいたあと急に寒さ

が訪れることがある。まさに三寒四温の気候なのだが、料峭の「料」は撫であるいは触れるの意味があり、「峭」は山が尖っている様子から厳しさの意味があるから、つまり春の風がまだ肌を刺すように冷たく感じられる頃のことを言う。しかし、そんな春の寒さがぶり返すような日でも、夜海に来て打ち寄せる波を見ていると、白き波頭には冬とは違ったやさしさがあり、そんなところからも春の気配を感じさせる。夜目に見る潮の色も冬の間の色よりもどことなく明るく感じられる。

大地よりもらふ治癒力青き踏み 谷口みちる

人間は本来大自然の中にあり、自らの命には治癒力が備わっている。ところが近年は対処療法的な西洋医学の発達により、この治癒力も忘れかけていた。薬の副作用なども問題にされるようになって、自然の力で治癒できることが見直されるようになった。人間社会、何もかもがスピードの社会、病を治すのも時間をかけずに対処療法をとることが多くなっているが、人間の治癒力というものをもう一度信じて、自然の中で時間をかけて病を治すことが出来たらどんなに幸せであろうか。春の大地の野の若草を踏んで見るとその実感が体の中にひしひしと伝わる。